様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年８月３０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：20730454
研究課題名（和文）　里子の持つ家族認識と支援モデルの検討

研究課題名（英文）A study of family recognition and support model on foster children

研究代表者
御園生　直美（MISONOO NAOMI）
白百合女子大学・文学部・助手
研究者番号：50433850

研究成果の概要（和文）：
里子の家族観の検討から、自立を意識する時期は愛着対象や安全基地の喪失を想起することから、不安を高めやすいことが明らかとなった。同時にこの時期は自己の問い直しが起こり、家族認識の再構築が行われる一方で、新たな関係性の構築や修復が難しい場合には、措置変更につながる可能性も高まることも示唆された。里子支援では、ピアグループへの参加が、相対的、客観的に自分自身を捉える視点を得るという点で効果的であった。特に里子会スタッフとの交流は現実感を伴った自立後のロールモデルとして機能し、自立への不安を緩和することが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Foster children seem to feel fear when they recognize the leaving a foster family because the experience evokes the loss of attachment figure and secure base. At the same time it is possible that they identify with themselves as foster children and create the new relationships between foster families. On the other hand, it is likely that children leave foster families before 18years old when they could not go through the experience. A peer group for children is effective to give them a relative and objective view of themselves. The experiences that children meet the staffs who have left foster families show them the role model in future and ease the anxiety of leaving a foster family.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：里親、里子、社会的養護、ピアグループ、児童虐待

１．研究開始当初の背景

集団養育による施設養育にくらべ、安定した家庭の中で継続した養育者のもと、個別のケアを受けることができる里親養育は、虐待や遺棄などさまざまな問題から実親との生活が困難になった子どもたちにとって非常に有益なものである。しかしながら、わが国ではこうした社会的養護を必要とする子どもたちにとって安定した家庭での生活が必要であるという認識が薄く、要保護児童の９０％以上が依然として集団による施設養育をうけており、里親家庭で生活する子ども達への援助も、また心理学的な研究も全く行われてこなかったのが現状である。

こうした状況に国際的な批判も強く近年里親養育推進する状況が生まれているが、長期間施設養育を受けていた子どもが突然、里親家庭で生活することがどのような意味をもたらすのかについてはほとんど専門的な知見が得られていない状況がある。そもそも、わが国ではこうした里親制度に関しての専門性が構築されていないことから、里親家庭委託後に生じる問題を安易に子ども側、あるいは里親側に帰結し、里親不調という結果を招くことが少なくない。

そこで本研究では里親家庭に委託される子どもがもつ家庭認識含めて、里親家庭で暮らす子どもの里親家族への認識と、子ども達が必要とする支援ニーズについて明らかにすることで、今後の里親養育の推進と、里子支援のモデルの構築を行うことを目的とする。

２．研究の目的

本研究では（１）里親家庭での関係構築に大きな影響を与えると考えられる子どもの家族認識と、（２）子どもたちが望む里子支援のモデルについて検討することを目的とする。

家族認識については、里親家庭に委託される以前の児童養護施設で暮らす子どもたちも含め、里親家庭に委託される社会的養護の子どもたちが抱く家族認識やその内容、またそうした認識を得るにいたった心理的プロセスについて検討する。

里子支援モデルについては、直接的な里子支援となる里子のピアグループを開催するなかで、里子の抱く支援ニーズとピアサポートの有効性について検討を行う。特に里親家庭で 18 歳の措置解除を迎えるまでに子ども達がどのような葛藤を抱き、またどのような支援を求めているのかについて詳細に検討し、欧米での里親支援を概観しながら、わが国独自の里子支援のモデルについて検討していくこととする。

３．研究の方法

研究１：里子の持つ家族観についての検討：
＜予備調査＞

里親家庭や児童養護施設で生活する子どもたちに家族観や自己認識を中心とした半構造化面接を行い、親子観、家族観、自己認識について検討し、本調査における面接の質問項目を抽出した。

【時期】予備調査 2008 年 4 月～6 月
本調査　2008 年 8 月～2009 年 5 月

【調査対象者】里親養育を受けている、または現在受けている 15 歳以上の子ども 10 名

【方法】半構造化面接

予備調査で得られた内容から、社会的養護の元にいる子どもの家族観、親子観に関す認識について検討した。また同時に里子の持つ対人関係の特徴や自己の確立などについても検討した。

【里親家庭で暮らす子どもへの面接調査】

家族認識や里親家庭での生活について、それぞれの個別のケース検討を行った。また 18 歳以上の元里子には、自立に向けての不安や葛藤、当時もっていた支援ニーズについて尋ねた。 里親委託前に施設での養育を受けていた子どもたちについては、それぞれの状況の違いからどのような変化がもたらされるのかについて検討した。

研究２：里子支援プログラムの開発：

Ｉ里子ピアサポートでの参与観察：

各里親会イベントや、里子会と共同で、里子や元里子のための交流会を開催した。その際に、里子たちの支援ニーズについて意見を求めると同時に、里子によるピアサポート支援の有効性について検討をおこなった。予備調査として社会的養護を経験した子どものための当事者団体への参与観察や意見交換を行った。

【時期】2008 年 7 月 2 回・2009 年 2 月 1 回、計 3 回、里子ピアグループを開催した。7 月の 1 回は関東地域の里親大会の会場の 1 室を借りて実施とした。

＊里子による当事者団体への参与観察を、2008 年 4 月～2009 年 5 月に行った。子どもたちの抱えやすい問題の把握や、ピアグループにおける子どもたちの要望についても助言を受けた。

【参加者】

全体の参加者の合計 41 名（男子 21 名、女子 20 名）。平均年齢 18.8 歳（12 歳～31 歳）平均里親委託年齢 7 歳（0 歳～17 歳）

【方法】里子会、里親会などの協力を経て、チラシを送付し参加を募った。また当日の交通費は事前に申請があった場合には全額支給という形で、里子、里親家庭への負担を減

らすことに配慮した。スタッフの人数と立地の問題から、会場の状況によって参加者は中学以上の会と高校生以上の会を２パターンで募集を行った。

【グループの事前準備】ファシリテーターには里子会のスタッフとして、筆者による里子サポートグループに参加したことのある 18 歳以上のメンバー3 名に依頼した。事前にルールの説明、ファシリテートの仕方、当日のテーマについて話し合う機会を２回ほどもった。

【グループの実施】

１グループは５～６人とし、自己紹介を含めたウォーミングアップゲームを行った後、ピアグループでのルールの確認をそれぞれのグループ内で行った。また当日話し合うテーマの提示後、１人５分程度という持ち時間を伝え話し合いを開始した。

グループは男女のグループ別、男女混合の年齢別で均等に分けた２タイプのグループ構成で実施した。後半のグループ開始時には、前半と同様の話し合い導入の手続きが行われた。

グループ終了後には、無記名のアンケートを実施した。

Ⅱ・支援モデルの構築：

（１）海外での里子支援プログラムの視察として、アイルランドのユニバーシティ・カレッジ・オブ・ダブリン（UCD）で行われたＩＦＣＯ（International foster care organization）の国際シンポジウム（2009 年 7 月 12～17 日）に出席し、同時に子どもプログラムに参加している里子への聞き取り調査や視察を通して里子支援のモデルを検討した。

（２）アメリカでの里親関連団体と里子支援の現状を視察するために、シアトルで児童福祉関連施設の視察と意見交換を行った。（2008 年 8 月 11 日～18 日）

社会的養護の子どもたちについての裁判所や治療施設の訪問などを行った。Ryther Child Center（薬物治療を中心とした児童養護施設）では、子どもの成育歴や問題に専門的な治療を中心としたケアについて、Cocoon House（ホームレスとなった子どものシェルター）では、ティーンエイジャーへのケア内容について、施設の見学と専門スタッフとの意見交換を行った。HUBHOUSE（里親家庭のネットワーク化）では、里親養育の強化について実際のハブファミリーとして認定された里親と、それを支援する団体スタッフとの意見交換と視察を行った。

欧米諸国における里子支援を視察したうえで、我が国の里子支援モデルの構築に必要な内容の比較検討を行った。

４．研究成果

研究１：里子の持つ家族観についての検討

（１）里親家庭への移行の検討では、幼少期に乳児院で養育体験をうけた子どもの語りが 2 タイプに分類された。1 つは以前の養育者である保育士へ強く喪失感や怒りを感じ、それを適切に表現することが出来ていた群と、里親委託を新しい生活場所としての環境変化としてとらえており、養育者の喪失よりも交代として認識している群の２タイプであった。養育者の喪失としてとらえたグループでは、喪失のプロセスを経てのち、里親を新たな養育者として自己の中に機能させており、単に交代と捉えるのではなく、以前の養育者との間の喪失を体験していることが特徴であった。

（２）里子である現実に直面する時期に相談者として支援者が機能する事や、孤立感が深まる時期に自己の状況を客観的に理解することを可能にさせる他者の存在は、里親のみでなく、周囲の支援者や友人の存在なども大きな役割を担っていたことが明らかとなった。

（３）里親委託直後だけでなく自立が近づく 10 代後半も里親家庭や里親家族についての認識に変化がみられていた。特に自立は里子に喪失の再体験を引き起こしていた。同時に喪失の再体験は、強い不安を喚起させ、愛着対象や安全基地への再確認が行われる機会を与えていた。里親側は里子の不安や孤独感を抱えるコンテイナーとしての能力を求められていた。こうしたプロセスから家族認識における関係性を強める場合と、直面していなかった新たな問題がより強く認識されることで関係の構築や修復が困難になる場合がみられた。その場合には外的な要因に問題が焦点化されやすく、一時的、また長期的な措置変更につながる可能性が強いことも示唆された。

研究２：里子支援プログラムの開発：

Ⅰ里子ピアグループについての検討

（１）予備調査から、子どもたちの話したいテーマに違いが大きいこと、ティーンエイジャーという年代の特徴から、ピアプレッシャーが強く、周りの状況や話しの流れで、本質的な問題を話すことが難しいと感じる子どもたちがいることがあきらかになった。そこで、それぞれのニーズを含めた話し合いのテーマの内容を、「実際の里親家庭での日々の出来事(お小遣い、ルール)」から、「生みの親」、「里親への気持ち」、「里子である自分自身について」、「友達への説明の仕方」、「自分自身の里子という状況の理解」、「乳児院・養護施設について」、また「今回参加しようと

した目的」、「自分の話したいこと（自由に）」などを中心とした 12 項目を作成した。それぞれが話をする際に番号で示されたそのテーマを選んで話しはじめることで、参加者が話をする際のプレッシャーを減らすように努めた。

（2）アンケートは、5 件法による 10 項目の質問内容とした。「今回のイベントに参加してよかったか」では、「良かった」と回答したものが全体の 37 名（90%）であり「あまり当てはまらない・当てはまらない」は１名（２%）であった。
　今回の結果を得た理由には、「同じ境遇の子どもたちと話す機会がない」、「先輩の話を聞きたい」、といった里子同士の話しあいの場を求める項目に「当てはまる」と回答したものが過半数を超えていたいことも関連していると思われた。

（3）里親家庭で暮らす子どもたちは、普段の生活で自分の悩みをじっくりと話をする機会がないと感じており、そのために 18 歳以降の措置解除後の自立へのプランや自己像を持ちづらく、孤立感などの不安を抱えやすい傾向が示唆された。同じ境遇を体験している里子同士のピアサポート孤独感を減らすことに効果があった。
　しかし、自立を直前に控えた 10 代後半の里子と、里子である自分に向かい合いはじめた 10 代前半の里子では本質的な話の内容に違いがみられていた。

（4）里子のためのピアグループを開催するためには、事前の状況設定とファシリテーターの役割の重要性が大きいことが示唆された。今回の調査ではファシリテーターが１８歳以上で里子の抱えやすい問題をすでに経験している者、また聞いたことがあるものであり、また里子会スタッフとして、悩みを抱える里子達に対しサポーティブな姿勢を心得ている参加者であったことがグループの満足度に大きな影響を与えたと考えられた。

（5）発達課題の影響から、権威的な対象としてとらわれやすい大人よりも、里子の状況をよく理解した里子のファシリテーターを準備することはグループの満足度を高めると推測された。
里子同士で日頃の不安や心配などについても言語化するという性質から、付き添いも含めた里親の入室を断り、グループの最中は里子だけの空間を尊重した。自分の気持ちを自由に表現する空間を確保することが重要であった。

Ⅱ支援モデルの構築

（1）ＩＦＣＯ国際シンポジウムでは、社会的養護を体験した子どもたちが自分たちの気持ちや求めている支援について自ら語るという時間が、里親や支援者向けの大人のシンジウムの際に用意されていた。
　また里親や支援者のためのプログラムが行われているのと同時並行で、子どもたちのためのプログラムが行われているという特徴があり、特にティーンエイジャーから 30 歳までの子どもたちには自分たちの意見や社会に対しての要望などを掘り下げ、エンパワメントするという目的で先輩の里子達が自らリーダーとなったシンポジウムが行われた。
　わが国でも子どものプログラムが並行で行われていることがあるが、基本的に小学生以下の子どもたちのエクスカーションを目的としたもので、里親が大会に参加している間に子どもたちへ保育を提供するという視点でのプログラムにすぎない。またこれは小さな子どもを持っている里親のみの支援となっており、年齢の高い子どもたちを育てている里親の支援にはなっていなかった。本来、最も里子への支援が必要になるはずである思春期以降に支援が確立していない現状を示している。
　本研究において 7 月のピアグループを里親大会の開催中に実施し、その際には里親と一緒に会場まで来ることができ、里親も大会に参加できるため、最も多くの里子の参加があった。アンケートでも子どもたちの会があるのなら、里親の大会にまた参加したいという回答が出ていたという事実から、定期的な里子のための支援の場として、現在の里親大会などを活用することが、今後の里子支援の充実を促し、次世代のリーダーとして活躍する里子の養成などにもつながっていくと考えられた。

（2）シアトルの児童福祉施設の視察では、高度な専門的治療やネットワークの充実という点での意見交換と視察を行った。
　わが国でも子どもの問題が深刻な場合には集中的に治療を受けられる高度な治療施設が必要と考えられる。
社会への適応が難しいティーンエイジャーに対しての受け皿と、治療へ結びつけるスキル、またそうした子どもたちを受けいれる里親たちのメンタルヘルスの向上も含めた支援にも大きな重点を置くことが長期にわたり里子支援を支えるものとなることが示唆された。

【全体考察】
研究 1 里子の家族観の検討では、里子（元里子）10 名に対して半構造化面接を行った。その結果、18 歳での措置解除での自立が近づく

時期は、愛着対象や安全基地の喪失を想起することから、里子の中に孤独感や不安感が高まりやすく、またこの時期は里子である自分自身の存在への問い直しが起こり、里親家庭についての認識や里親家族との関係性の再構築が行われることが明らかになった。特にアイデンティティの確立と重なる時期である事から自分自身の生い立ちについての適切な理解を得ることが重要であった。生みの親への思いが高まる一方で、里親家庭が最終的な居場所であると認識したものは、里親家族への強い一体感とともに里子である自己の存在を受け入れることが可能となっていた。しかしながら、新たな関係性の構築や移行が難しかった場合には、一時的なあるいは最終的な措置変更につながる可能性も同時に高まることが示唆された。自己の生い立ちに向き合うためには、安全基地として機能する里親家庭や信頼できる支援者からのサポートが重要であり、里親は里子の不安や混乱を受け止め包容する(コンテイナー)機能が求められた。研究２効果的な里子支援の検討では、里子会スタッフの協力を得て３回の里子ピアグループを開催した。その結果、同年代の里子との交流が、相対的、客観的に自分自身を捉える視点を与えるものとして効果的であることが示唆された。またグループでは、それぞれの生い立ちや、自立への不安などを扱うために、ファシリテーターによる適切なグループセッティングが不可欠であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①御園生直美、里親養育とアタッチメント 子どもの虐待とネグレクト 10(3), 307-314, 2008-12
②御園生直美、里親家庭で育った子どもの心理的プロセスの検討--里子Ｓの事例を通して 白百合女子大学発達臨床センター紀要 (12), 57-65, 2009

〔学会発表〕（計２件）
①御園生直美、“里親家庭で暮らす子どもの心理的発達（１）－思春期における生みの親への葛藤を中心として”、日本心理臨床学会第27回大会、２００８年９月５日、つくば国際会議場
②古澤頼雄,富田庸子,御園生直美人生において出自を知ることの意味－非血縁家族への発達支援を考える－　日本発達心理学会第20回2009年3月24日

〔図書〕（計１件）
①繁多進編　御園生直美他、第 13 章　里親養育と子育て支援、子育て支援に活きる心理学　2009　p 152～162

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
御園生　直美（MISONOO NAOMI）
白百合女子大学・文学部・助手
研究者番号：50433850

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし